

## 韓国文学 1

韓国文学、古典文学、口碑文学、記録文学、韓文学、郷札文学、ハングル文学、高麗歌謡、時調、小説、人形劇、巫劇、仮面劇、歌辞、建国神話、巫俗神話、定型詩、三章(六句、音譜)、連続体、パンソリ、勸善懲惡  
現代文学、象徴主義、啓蒙主義、文芸同人誌、自由詩、事実主義、浪漫主義(耽美主義)、新傾向派(KAPF, プロ文学)、国民文学運動

### 1. 韓国固典文学

#### 1.1. 韓国文学の概念と範囲

韓国文学とは、韓国人によって韓国語で書かれたものであり、韓国歴史に含まれる生活空間で作られた文学を指す。現在の韓国領土は大韓半島であり、韓半島で成立した文学の韓国文学であるが、高句麗時代までは満洲まで拡張していたので、当時の韓国文学は満洲までの生活空間を包含するものである。一方、ハングルは朝鮮朝世宗の世に創製されたものであるため、それ以前に漢字で書かれた漢文学も韓国文学と認める。しかし、それ以外の他の文字によって書かれたものは韓国文学として認められない。従って、日帝時代に日本語で書かれた作品は韓国文学として扱うことはできなかった。現代でもアメリカで英語によって書かれたものは、よしんば韓国人が韓国の内容を素材としても韓国文学とは言えない。

韓国文学は大きく言葉で伝承された民謡、説話、神話、舞歌などの口碑文学と、文字で書かれた記録文学に分けられ、記録文学は、更にその時代の文字手段によって新羅時代の郷札文学とハングル創製以前の韓文学、それ以後のハングル文学に分けることができる。

#### 1.2. 韓国文学の分岐点

韓国文学は敘情様式に属する郷歌、高麗歌謡、詩調；敘事様式に属する小説；劇様式に属する人形劇、巫劇、仮面劇；敘述様式に属する歌詞、紀行文、日記、手紙などがある。このような様式に分類される韓国文学は、それぞれ出現した時代が異なるが、まず、古代には神話が、三国時代(B. C. 57-A. D. 668)と統一新羅時代(668-936)には郷歌が現われ、高麗時代(936-1392)と朝鮮時代(1392-1910)にかけて高麗歌謡、詩調、家事、小説などの様々な種類の作品が書かれており、朝鮮時代には小説、パンソリ、仮面劇などが盛んに登場した。この中には韓国文学のみ特に認められるものがある。それらは、第一、敘情様式に属するもので新羅時代の郷歌と高麗時代の京畿体歌、朝鮮代の詩調、第二、敘事様式のものとしては巫子の神に対する歌である巫歌とパンソリ、第三、劇様式に属する仮面劇、人形劇、巫子のクッソリである巫劇、第四、敘述様式に属する歌辞文学などがある。以下、それぞれの分岐点について順次考察する。

##### 1.2.1. 神話

韓国の神話は国を建てた一最初の王についての神話である建国神話と武臣(무속신)の来歴を歌ったもので口誦によって巫子によって伝えられて来た巫俗神話に区分される。

建国神話には古朝鮮の檀君神話、高句麗の朱蒙神話、新羅の朴赫居世神話、駕洛国の金首王神話、また氏姓神話であるキムアルジ神話などがある。このような建国神話は地域により北方神話と南方神話に分類されるが、古朝鮮、高句麗などの北方神話の特徴は始祖の誕生が強調され、その始祖は予め存在した国から分かれたり、また他の国を立てるといった形式をもつのが代表的な例である。反面、南方神話は始祖が誕生して結婚する点がより重要視されて、様々な集団が集まり一国を建国する形式で新羅と駕洛國が代表的な例である。具体的に言えば、北方神話である檀君神話では桓因の息子桓雄が、熊女に変化した熊と結婚して檀君の生まれる内容が中心となっている。朱蒙神話では太陽神である解慕漱と水神である柳話夫人との間に出生する東明王の話が中心である。一方、南方神話である朴赫居世神話は朴赫居世が井戸から生まれたアルヨン(英)と結婚するという内容が中心となっており、駕洛国の金首露王も妃の許黄玉と結婚するストーリーを中心に神話が展開される。この中で最初の国家である古朝鮮の建国神話である檀君神話は、次のとおりである。この神話は高麗忠烈王時に一然が書いた『三国遺事』に伝えられる。

巫俗神話は、記録が残らず、巫子のクツで伝承されたもので口碑文学に属する。この巫俗神話では天地創造神話と家族と家庭を守る城主、至信神話があり、これ以外に孝女が父のために彼の世も出入りする孝を扱ったパリ公主神話と、農業生産の豊饒と子供が授かることを祈るタムグンアギ神話がある。

### 1.2.2. 郷歌

新羅時代に広く流行った詩歌で、漢字の音(sound)と意味(訓, meaning)を借り、国語を表記した郷札で書かれている。作家は主に僧侶と花郎であるが、主として僧侶が多く、そのため内容も仏教的なものが多い。現在、『三国遺事』に14首、『均如傳』に11首、全25首が伝えられる。記録によると、新羅の真聖女王の時の大矩和尚と角干魏弘(각간위홍)が編纂した『三代目』という郷歌を集めた本があると言うほどに広く言い習わされたにもかかわらず、伝存しない。現在伝えられものの中で、『均如傳』に載せられたものは仏教的な内容の仏賛歌で、『三国遺事』に伝えられる14首が全てである。

郷歌を残した者は、僧侶の月明師と忠談師である。月明師の‘兜率歌’は空に二つの日の昇る異変が生じずる年の病を治して神を呼び、農業に対する願いを祈る歌で、‘祭亡妹歌’は兄が死んだ妹を追慕し、死後極楽世界で再び会うことを約束するといった仏教精神が現われている。忠談師の‘讚者婆郎歌’は人間の理想世界と現実世界での不可避の葛藤をジャッナムになぞらえ屈強な意志をもって生きるべきことを綴っている。百済の武王が、少年時代に新羅真平王の公主を愛して世間に広めたという‘薯童謠’と、倭軍の侵略を阻むため現われた彗星を無視する融天師の‘慧星歌’は皆呪術的なものであり、彼らの願いを具現するために作ったものである。

‘怨歌’は信忠が王となった孝成(王)を恨み綴ったものであり、‘願往生歌’は僧侶の光徳が友の嚴莊と極楽世界の憧れを歌った歌である。この外に盗賊が智異山を越えて解脱する内容の‘遇賊歌’、希明が目の不自由な娘のために祈った‘千手大悲歌’、絶世の美人水路夫人に花を摘み取って渡した牽牛老人の‘献花歌’などがある。民謡形式の‘風謠’は供養で土を運ぶ時に歌った労働謡である。

特に月明師の‘祭亡妹歌’と忠談師の‘讚耆婆郎歌’は優れた修辞技巧と崇高な詩の精神の発露として、永遠に評価を受ける佳作として知られている。これら作品で共通に認められる特徴は、現実的な問題を超越した永遠な世界を探求しようとする哲学が土台になっているという事実である。それは即ち、仏教的思想が彼らの人生観や世界観または宇宙観にこの上ない大きな影響を及ぼした証拠だと考えられる。

### 1.2.3. 詩調

詩調は高麗末期に発生し、朝鮮時代に広く流行った詩歌として、定型詩である平時調と長詩である辞説時調がある。定型詩である平時調は英米の Sonet、日本の俳句、中国の律詩に該当する。平時調がいくつか繋げられたような形式の辞説時調は、朝鮮後期に発達した。

定型詩である平時調は、概ね明らかな形式を備えているが、3-4字からなる音譜(foot) 四つが集まって章(line)となり、三つが集まり一つの詩調となる。最終章の第一音譜は、常に 3字である。鄭夢周の‘丹心歌’を例であげれば次のとおりである。

この身が減び百度正されて減び[初章]

白骨が塵土となっても魂があってもなくても[中章]

お慕いする方への一途な丹心が変わることがありましようか[終章]

このように詩調の形式は 3章6句が常に 3、4音節が続く。辞説時調の形式は、このような平時調の形式がいくつかつなげたのものである。

いくつかの詩調を紹介すれば次のとおりである。

成三問 死六歌(忠義歌)

この身が減び何になるのだ

蓬萊山第一峰の落落長松と化し

白雪が滿乾坤(空と地に満ちる) な己の孤高を誇らむ

黃眞伊

青山裏(青々とした山の奥-深山) 碧溪水(青く清い谷川の水) は수이 감을愛することなかれ。

一度至れば戻るのが難しからむ

明月が空山に満ちたり、暫しの憩いはいかがか

朝鮮王朝時代の文学は概して壬辰倭乱を境として前後期に分けられる。何故ならば朝鮮朝の前期は高麗時代に作られた詩歌文学が爛熟していく時期と考えられるし、後期に入っては文学が一般的に散文化される傾向を帯びるようになるからである。このような変化はその思想的な背景の変化を表すこともある。すなわち、従来の支配的な指導理念であった儒教思想が徐々に後退し、新たに登場した実学思想が文学作品に影響を及ぼすに至ったのである。そして朝鮮前期の文学が主に貴族両班たちの詩歌文学に主眼が重かれていたのに比べ、朝鮮後期には詩調が庶民の手に移り、辞説<sup>2)</sup>と詩調という新しいジャンルを生むこととなった。庶民を対象とする‘パンソリ’の辞説が作り出され、またその大部分の読者を、大衆と女流層として抱えていた~~た~~古代小説が発達して、過去には男性中心であった文壇の一角を女性が占めるようになったのである。

#### 1.2.4. 歌辞

歌辞は、高麗末期に起こり朝鮮朝末期まで用いられていた詩歌の一種として詩調の形式をとるが、さらに長い4.4調連続体である。歌詞の作家としては朝鮮成宗の代の松江鄭澈が最も有名であるが、彼は王を歌った‘思美人曲’、‘續思美人曲’と関東八景を見物し歌った‘関東別曲’など多くの歌詞作品を残した。その外にも丁克仁(号は不憂軒)の‘賞春曲’、朴仁老(号は蘆溪)の‘太平詞’、‘船上歎’、‘陋巷詞’などが有名である。その他、両班の手によって書かれた歌辞に紀行歌辞と流配歌辞がある。紀行歌辞である‘燕行歌’が代表として挙げられよう。また流配歌辞では宋疇錫が、彼の祖父宋時烈が徳源に配流された時に付いて行き、帰って来て作った‘北関曲’、安肇煥が南海の島に流刑されたときに作った‘万言詞’、哲宗の代の金鎮衡が明川に流刑されたときに作った‘北遷歌’などが広く知られている。また繊細な女性たちの喜怒哀楽と守るべき礼節や良妻賢母の道理など、婦女子の心情と生活を歌った閨房文学である内房歌辞もある。

#### 1.2.5. 小説

古代小説は、その起源を民俗的な様式である説話文学に求めることができる。最初の小説と呼ぶに値するものは15世紀に書かれた‘金鰲新話’である。これは朝鮮朝世祖の代の金時習(号は梅月堂)が書いたものとして知られている。およそ1460年から1470年の間に書かれたようである。この‘金鰲新話’は、一種の短編集でここには‘万福寺樗蒲記’、‘李生窺牆傳’、‘醉遊浮碧亭記’、‘南炎浮洲志’、‘龍宮赴宴錄’などがある。

しかし、この‘金鰲新話’は漢文で書かれたもので、我が国の最初のハングル小説は成宗の代の15世紀末、蔡壽による‘薛公瓚傳’である。その後、光海君の代にはホ・ギョンが‘洪吉童伝’を、肅宗の時にキム・マンジュンが‘九雲夢’を作ったし、ヨンアムバク・チウォンは‘許

生伝’，‘兩班伝’，‘虎叱’などの漢文小説を残した。その外にパンソリとして口伝され、記録されて小説として残ることになった作者未詳の‘春香伝’、‘沈清伝’、‘興夫伝’、‘長花紅蓮伝’などがある。これらの作品は庶民大衆の中に深く根付き、そのプロットとスタイルも完全に庶民的であった。古典小説の特徴としては勧善懲悪的な内容展開と happy ending の結末が挙げられる。

#### 1.2.6. パンソリと仮面劇

朝鮮王朝後期に特別に形成されたものにパンソリがある。このパンソリの形成過程についてはまだ定説がないが、現在までに明かにされたところでは説話がパンソリに発展し、それが文字として記録された時には古代小説として読まれたはずだという見解が正しいものと考えられる。このパンソリは肅宗の頃から説話を唱と呼びながら、主に全羅、忠青一帯の芸人によって作り出されたものと考えられる。元々12種のパンソリがあったが、高宗の代のパンソリの大家申在孝によって修正、整理されて6種に確定された。

結びに民族的な芸能の一形態ではあるが、文学的な面で戯曲的な要素を帯びた仮面劇、人形劇を忘れてはならない。その中で代表的な仮面劇としては、楊州地方の別山台ノリが挙げられるが、起源や発生過程はまだ学界では完全に解明されてはいない。これは全部で12の過程に分けられ、仮面をかぶって歌と踊りと辞節によって進行される。一方、人形劇として絡繰り人形劇が挙げられるが、フクベで人形を作ったため、朴僉知劇とも言う。仮面劇や人形劇にはすべて朝鮮後期の庶民大衆の生活感情が強烈に反映しており、それらの鋭い諷刺精神はそれなりの様式を完成させたと言えよう。

## 2. 韓国現代文学

概して開花期まで私たちの先祖によって築かれた昔の文学を‘古典文学’と呼び、その伝統を基礎として西歐文学の影響の下で新しく形成された文学を‘現代文学’と呼ぶ。一方、現代文学と言えば‘現代に築かれた文学’という漠然たる通念が適用されうる。しかし、意識や技法面から開花期までの文学と様相を異にする新しい文学の胎動(あることが生じようとする機運が芽ばえること)は、1910年頃から約10年間のことであり、厳密に言えば韓国現代文学は1910年頃から成立したものであると言える。

### 2.1. 現代作品の登場

胎動期の詩の部門において重要な役目をした詩人は金億である。彼は創作詩‘夜半(야반)’(1915)、『春は行く(봄은 간다)』(1918)などと翻訳詩及び詩論で新しい詩の在り方を示し始めた。この時、西歐の象徴主義(symbolism)が導入され始めた。新しい小説としては李光洙の断片‘幼い犠牲(어린 희생)’(1910)と、玄相允の断片‘漢方医の一生(한의 일생)’(1914)そして李光洙の長編‘無情(무정)’(1917)、『開拓者(개척자)’(1918)などが発表された。我が国の最初の近代的長編小説とし

て評価されている‘無情’、‘開拓者’は共にその構成が西欧の近代小説に近く、主題は啓蒙主義的(philosophy of enlightenment)であった。

このような現代文学の態度にはさまざまな要因が作用していた。第一に、19世紀後半以来の政治的社会的激動(急激な動き)と、二番目に西欧文学の影響を指摘できる。三番目に国文に対する自覚、四番目に新聞、雑誌と出版社の登場及び新しい文学意識の形成が挙げられる。

## 2.2.現代文学の定立

1919年は、3.1運動を前後して我が民族の独立運動が国内外において以前より遙かに激しくなり、そしてよりすべて広範囲に展開された年である。ほとんど同時に幾多の青年団体がさまざまな社会運動を起こし、‘朝鮮日報(조선일보)’、‘東亜日報(동아일보)’や、‘開闢(개벽)’のような新聞、雑誌が我が民族の意思を代弁するようになった。このような社会的、時代的変化に劣らず文学部門でも明確な変動が興った。その中心になったのは‘創造(창조)’(1919)、『廢墟(폐허)’(1920)、『薔薇の村(장미촌)’(1921)、『白鳥(백조)’(1922)など文芸同人誌である。これらは1910年代の李光洙や金億に比べ、はるかに積極的に西欧の近代的文芸思潮を受容し、大胆に自由詩とかりアリズム小説の創作を試みた。我々の現代文学は、正にこのような状況の中で定立された。

1919年2月に創刊された文芸同人誌‘創造’に重要な‘花火(불놀이)’が発表された。当時この作品は国語表現が優れたことと、強烈な灯火の象徴的なイメージであるとか、作品全体のフレッシュなリズムなどによって我が国最初の自由詩として評価された。

この時期に自由詩を発表した主な詩人は、上述の朱耀翰、金億を含めて黄錫禹、吳相淳、李相和などである。当時彼らの作品には象徴派的(symbolistic)傾向が最も強く、浪漫的、耽美的(aesthetic)な傾向を呈していた。金素月は、我が民族特有の情恨(情と恨)と民謡調の調子を基調として多くの作品を発表しており、韓龍雲は象徴的な要素と仏教的な要素の強い作品を発表した。

これらの詩集で、金億の‘クラゲの歌(해파리의 노래)’(1923)、卞榮魯の‘朝鮮の心(조선의 마음)’(1924)、朱耀翰の‘美しい夜明け(아름다운 새벽)’(1924)、金素月の‘つつじの花(진달래꽃)’(1925)、韓龍雲の‘ニムの沈黙(님의 침묵)’(1926)が刊行された。これら詩集は、自由詩の形成に貢献した点においてその文学史的意義が大である。

ニムの沈黙

韓龍雲

ニムは去りました。ああ、愛する私のニムは去りました。

青い山の光を悟り、楓の林に向かって延びる小道をたどり、どうしても振り切って去りました。黄金の花のごとく固く輝いていた昔の誓いは冷たい埃となって、嘆息の微風に飛び去りました。鋭利な最初のキスの記憶は、わたしの運命の指針を歪ませておき、後退りして消え去りました。

わたしは香しきニムの囁きに耳が塞がり 花香しきニムの顔 (かんばせ) の虜となりました。  
愛も人の業ゆえ、巡り会ったときにあらかじめ別れを案じ氣に留めない訳ではなかったものの、  
別離は思いもよらぬこととなり 驚きの胸は新たな悲しみに引き裂かれます。  
されど別離を無用の涙の源泉とするのは、みずからが愛の自覚に目覚めたため、抑えがたき悲  
しみの力を転じ新しき希望の釣瓶に注ぎ込みました。  
わたしたちは、出会いのときに別離を慮るように、別れのときにふたたび出会うことを信じます。  
ああ、ニムは去ったものの、わたしはニムを見送りませんでした。  
おのずの調べに打ち勝てぬ愛の歌は ニムの沈黙を包んだまま流れています。

1919年以後に登場した3人の主要な作家、すなわち金東仁、廉想涉、玄鎮健は写実主義(realism)技法を取り入れ、小説の文学的価値に重要性を置いた。これらに先立ち李光洙が1917年に出版した長編‘無情(무정)’と‘開拓者(개척자)’はその構成が西欧の近代小説に近く、表現も開花期の新小説に比べてはるかに新しいものであった。しかし、主題と作者の創作動機が啓蒙主義的なものであり、前近代的な要素が垣間見える。よってこの両長編は新小説とリアリズム小説の中間的なものとして評価されることもある。

このリアリズム小説の定立期に発表された重要な作品は金東仁の‘弱者の悲しみ(약한 자의 슬픔)’(1919)、『ベタラギ (배따라기)’(1921)、『カムジャ(감자)’(1925)、廉想涉の‘標本室の雨蛙(표본실의 청개구리)’(1921)、『ひまわり(해마라기)’(1923)、『万歳前(만세전)’(1923)、玄鎮健の‘貧妻(빈처)’(1921)、『ハルモニの死(할머니의 죽음)’(1923)、『運の良い日(운수 좋은 날)’(1924)などである。金東仁の場合だけはリアリズム技法を取り入れようとした意図が明らかである。廉想涉と玄鎮健の場合は、リアリズム小説の模範として評価されるほどであった。

この外に羅稻香は長編‘歓喜(환희)’(1922)、短編‘水車(물레방아)’(1925)、『桑(뽕)’(1925)、『口の不自由な三龍(멍어리 삼룡이)’(1926)などを発表した。彼もリアリズム技法をとったが、作品の主題や背景にはロマンチックな要素が強く現われている。

1923年頃からは、貧困を含めた社会問題を主に作品の素材や主題とする、また一つの新しい傾向として、新傾向派社会主義傾向の文学が形成された。その首唱者、金基鎮は詩、小説、評論を通じて‘運命に対する抗議、現実に対する反逆’を具現化(具現=ある内容が具体的な事実として現わすこと)しようとした。これに呼応した詩人として李相和、金東煥、小説家としては崔鶴松、朱耀燮をその代表的な例に挙げられる。

李相和はもとより‘私の寝室で(나의 침실로)’(1923)などのロマンチックな作品を発表したが、新傾向派に呼応した後は、『奪われた野にも春は来るのか(빼앗긴 들에도 봄은 오는가)’(1926)のように抵抗意識を内包した詩を書いた。

金東煥は最初の近代的叙事詩 ‘国境の夜’ (1925)で荒涼とした国境地域民の悲劇的な生を歌い、‘夜の灯火’ (1926)では小作争議に夫を送った妻の心情を綴っている。崔鶴松は主としてその自分の長年の放浪によって体験した貧困や社会的不条理を素材として ‘脱出記’ (1925), ‘バクドルの死’ (1925), ‘大水の後’ (1925)などを発表した。朱耀燮は貧民の生きさまを綴った ‘인력거군’ (1925), ‘殺人’ (1925)などを発表した。

奪われた野にも春は来るのか

李相和

今は他人の地 ----- 奪われた野にも春は来るのか  
私は全身に日ざしを浴びて  
青い空青い野とが交錯する所で  
カルマ(가르마)のような畦道沿いに夢の中を歩いて行く

唇をつぐんだ空よ、野よ、  
私の心には私一人で来たようではない  
君が引きつけたの誰が呼んだのか息苦しい、声を聞かせておくれ  
風は私の耳元にささやき  
何の痕跡も残さないで、裾を振り  
ヒバリは垣根越の娘のように雲間から嬉しそうに笑う

ありがたく育った麦畑よ  
夜半の十二時が過ぎに降った麗しい雨で  
お前は三段髪を洗った。私の頭さえ軽い。

独りでも喜んで行こう  
乾いた田をぐるりと回る物静かな溝  
乳飲み子をあやす歌を歌い、私は独りで肩踊り(어깨춤)して行く

蝶、燕よ、急がすな  
鶏頭の花、野の花( 들마꽃)にもあいさつをしなくては  
トウゴマの油を塗った人が草刈した野だからとたと見ておきたい

私の手に草取り鎌を握らせて  
ふくよかな乳房のように柔らかなこの土を  
足首がうずくほどに踏んでみたい、爽快な汗も流したい



川縁に出た子供のように

事情も分からず果てもなく走る私の魂よ

何を探しているのか、どこに行こうとしているのかおかしくはないか、答えておくれ

私は全身に草葉の香りを帯びて

青い笑い、青い悲しみが交錯する間に

足を引きずり一日さ迷う。どうやら春の魂が宿ったようだ

しかし今は……野を奪われ春さえ奪われた

新傾向と文学人がかなりの数に上った 1925 年に、彼らの KAPF(朝鮮プロレタリア芸術同盟) 結成をきっかけに、階級主義(階級を重視する思想や態度)文学に変わった。これを‘プロ(프로)文学’と一般に呼ばれる。これに対して反対または反発する文学人によって、国民文学運動が展開された。これは民族主義を基礎として時調の復活、文学の純純性擁護、国民歴史の再認識などを主として推進される。一方 KAPF に加担しないまま、プロ文学に同調する(他人の主張に自分の意見を一致させるとか歩調を合わせる)作家が現われた。これを‘同伴者作家’と呼ぶが、その代表的な作家は李孝石、兪鎮午であり、李孝石は‘行進曲(행진곡)’(1929)、‘露領近海(노령근해)’(1930)などを、兪鎮午は‘5月の求職者(5월의 구직자)’(1929)、‘女職工(여직공)’(1931)などを発表した。

- 1 韓国文学は何を意味しますか？
- 2 韓国古典文学の分岐について時代別に分類し、説明してみましょう。
- 3 朝鮮前期文学と朝鮮後期の文学とを比較し、話してみましょう。
- 4 提示された作品の中から一つを選んで鑑賞し話してみましょう。
- 5 韓国現代文学の形成に大きな影響を与えた西洋の文芸、社会的な事項は何ですか？
- 6 1920年代までの韓国現代文学の主な傾向について話してみましょう。
- 7 提示された作品の中から一つを選んで鑑賞し話してみましょう。

この時間では韓国文学1について学習しました。

次の時間では韓国文学2について学習します。

お疲れ様でした。